

東村山市民新聞



195号
定期購読料
一部 150円



市民のコロナ不況などまるで無関係とばかりに

議員報酬カットの提案を拒否!

自分たちは身を切るのはイヤ?



あれやこれやと難癖をつけ、対案も無し

コロナ禍を受け、国会議員も歳費を自ら4月から20%カット、また近隣の議会でもやはり議員自ら報酬カットをしている中、東村山市議会では、朝木議員が提案した議員報酬の限定的引き下げ案に対

し、立憲民主党の藤田議員を除き、全議員が反対した。

東村山市の議員

報酬は現在年間約780万円、政務調査費は年間15万円支給されているが、その原資はすべて市民税だ。コロナ禍によ

り、市内の生活困窮者は増加し、失業したり、収入が激減して家賃が払えなくなったりする市民からの相談が後を絶たない。

このような中で、朝木議員は8月12日付で、「年度内の議員報酬

落選した同じ党の前議員が驚きの行動に

一人会派を認めない陳情が可決

「珍情」?

6月議会で、「一人会派を認めるな」という内容の陳情(議会基本条例第4条第1項等の改正を求める陳情)が提出された。提出者は、昨年の選挙で立憲民主党公認で出馬するも再選ならず落選した奥谷浩一・前議員。

この陳情が出されたのは、5月7日。一方、同じ立憲民主党の新人・藤田まさみ議員が、同党二期目の上町区予議員、他2名との4人会派から独立し、一人会派「立憲民主党」を立ち上げたの

は連休前の5月1日。つまり、藤田議員が一人会派「立憲民主党」を立ち上げた途端に、同じ党から出馬して落選した奥谷前議員が、まるで藤田議員の会派立ち上げを妨害するような陳情を市議会に提出。

昨年の選挙では藤田議員が立憲民主党の新人として立候補したものの、先輩で現職の奥谷・上町議員は藤田議員を完全無視。藤田議員は地域割も名簿も一切ない中で、一人きりでの選挙活動となった。結果は新人の藤田

議員と現職の上町議員が当選し、同じく現職だった奥谷前議員が落選。

改選前、奥谷前議員と上町議員は、政務活動費を使い、二人きりで、年に何回も泊りがけの「視察旅行」に出かけるほどの仲の良さだったが、藤田議員の当選で、二人を引き裂くような結果となった。

藤田議員が一人で会派を結成した翌営業日のタイミングで、一人の会派は認めるなという陳情を、同じ党から出馬し落選した議員が提出するという珍事件。

多様性を認める時代と逆行し少数派の権利をはく奪する方向で議会でこの陳情は可決された。

の15%カット」を提案し、同26日に議会内全会派で協議をしたが、提案書に対して、あれこれ難癖をつけ、対案も出さず、この提案は立憲民主党の藤田議員を除いて、全員反対となり、提案自体も、市民の目に触れないところで潰される形となった。

あまりにもお粗末な言いがかり

また、提案には対案も出さずにあれこれ難癖がつけられたが、中でも馬鹿げていたのは「朝木議員は議員がお手盛りで議員報酬を引き上げることに対して」

「引き下げは議員自ら決める」というのは矛盾ではないか。」という佐藤まさたか議員の発言。

議員報酬のお手盛り値上げと、議員自らが自分の任期内に限定的に身を切る判断をすることとの区別もつかないほど、報酬カットがイヤだったようだ。

他市では理事者も議員も報酬カット

コロナ禍の影響で市民生活が困窮する中、二鷹や国立、調布など多くの自治体で、市長や理事者、議員などが自ら報酬や政務活動費をカットしている。

一方、東村山市議会では、コロナ

禍直前の昨年12月に「議員報酬および政務活動費に関する調査特別委員会」なる委員会を作り、公明党率いる与党会派は「東村山市議会の報酬は低い」という結論を出そうと必死だが、コロナ不況で他市では議員報酬等カットをしている中、東村山市議会の成り行きが注目される。

インサイドレポート 少数派排除、多数派のための市議会へ

朝木直子

改選前は一人会派も「議会運営委員会」に選任され、議会運営に関する議論に参加できましたが、改選後、与党議員が増えてからは、東村山市議会は少数派排除の方向へ進んでいます。議会の質問時間や市議会、たよりの掲載内容なども、少数会派を議論の場から締め出し、大会派に都合の良いように変わってきました。

特に公明党などは少数意見は無視していいかのような発言を公然としています。

ろくな議論もせず何でも多数決で決めていくことが民主主義だと思っている与党議員。何の勉強もせず、数合わせで立候補しただけの議員が増えている自民党などは特に劣化が目立ちます。

★納得いかないコーナー

①プレミアム付き商品券を購入しましたが、事情があり、5000円購入分が期限までに使えなかったので紙くずになってしまいました。でも普通の商品券は金券ですから期限がありません。仕方ないと思いつつも元金も戻ってこないのは何となく納得できません。(言葉明 高齢者)

②今年の駅前のカルガモ親子は池に水がなく、本当に可哀想でした。故障だと貼紙がしてありまし

たが、なぜあんなに長期間、修理できなかったのか疑問です。

(本町 会社員他)

③障がい者問題や人権問題を取り上げている議員が、故朝木明代議員のことを「あの人は万引きをしていた。それも一回ではないらしい。」などと、創価学会の人と同じ悪口を言っていました。低レベルで、人権の意味すらわかっていないのに驚きましたし、何も知らないくせに亡くなった人のひどい悪口を言うとは人間性を疑います。こんなレベルの人が議員をやっているのです。

(市内 会社員)

タウンニュース

市民ボランティアが毎日世話

噴水池のカルガモが巣立ち

東村山駅東口の噴水池では5月中旬に例年通り、噴水池でカルガモの雛が12羽孵化した。しかし、例年と違つのは、池に水がなく、カラカラの状態であったこと。市民が「雛たちが可哀想だから、早く池に水を入れて」と連絡しても、「故障(漏水)を理由に、市は頑として水を入れず、その結果、寒気がきた17日前後には冷たいコンクリートの上で小さな雛が死んで行き、これを見た市民から「可哀想じゃないか」というクレームが殺到。

このクレームに頭を痛めた担当所管がこのカルガモの雛たちを他の河川に「引越し」させるという計画を立てると、渡部市長はさっそく自分のフェイスブックで「カルガモ親子を引越ささせる」とカルガモ親子を助けるご宣伝。市民からは市長に対し称賛のコメントが多く書きこまれた。

しかし、この「計画」の中身は、職員一人にトラック一台、



網一枚を渡し、「カルガモ達をどこかに連れて行け」という乱暴なもの。

市民も集まり手を貸したが、捕獲できなかったばかりか安全な行先も見つからず、計画は中止。渡部市長はこの騒ぎの間、一度も顔を見せなかった。結局、水の無い池に市民ボランティアがブルーシートを敷き、毎日フンの掃除をし、雛たちが外敵に攻撃されない大きさに成長してから、市内の河川に移動。

続いて、7月初旬には別のカル

ガモの雛がかえったが、市民ボランティアと職員有志で献身的に世話を続け、雛たちは順調に成長。市は8月末にやっと池に水を入れた。

この噴水池のカルガモたちは、毎年、市民の癒しとなっているが、以前、この池にやぐらを建てて盆踊りをしていた関係者や議員の中にはカルガモのせいで盆踊りができなくなったと、カルガモの追い出しに必死の人たちがいて、様々なトラブルの歴史がある。

住む場所を追われ、街中で生活する野鳥たちとの関わり方については、議論があるところだが、9月中旬に雛たちは無事に巣立っていった。

朝木直子 VOICE

朝木直子略歴
▽諏訪町出身、化成小・二中、都立高武蔵・慶應大卒/会社勤務/高齢者団体役員/母・明代議員殺害事件後、遺志を継ぐ/地元FM局で番組作り/1999年から市議、現在6期目(草の根市民クラブ)



▶私は議員報酬のお手盛り値上げに反対し、任期中のお手盛り値上げおよび市職員より多いボーナス減額提案分は受け取り拒否しています。

2020年9月時点での議員報酬返上額合計 **572万4,910円**

答弁拒否する渡部市政

昨年のS-L解体の問題点については、これまで様々議会等で追及しましたが、最後まで行政側が答弁できなかった問題は「鉄の価格」です。

この解体契約は、有価物つまり鉄の価格を契約金額から差し引くことになっていました。契約当時、鉄の価格は1トンあたり約26000円でしたが、差し引かれた金額はたったの20万円。業者は鉄80トン売却したと言っていますから、本来なら200万円以上を契約金額から差し引き減額するべきです。議会がこの20万円の根拠を質すと、「同じように

S-Lを解体した自治体の例を参考にした」という答弁。「その自治体とはどこか」と質すと「それは答えられない」と、答弁拒否。これではその自治体の積算に根拠があったのか調べようもなく、さらにはその自治体の実在するのかも確認できません。

市民に説明できない支出があるなど、自治体にはあり得ないことです。

子どもの夢をかえるためにやってきたS-Lですが、最後はあらゆる意味で無惨で疑惑の残る形で解体されてしまいました。



朝木直子ウェブサイト

編集後記

新型コロナウイルス 感染拡大、いわゆる「コナ禍」によって、社会は大きく変わり、この影響を受けない人はいないという大きな問題になっています。諸外国に遅れをとっていたりモニターワークなどが進んだ半面、ほとんどの人は大きなダメージを受けています。

私と朝木直子議員は、市理事者も議員も、「先憂後楽」であるべきだという信念をもって活動しています。つまり「政治家は、人々よりも先に国のことや心配し、人々が楽しんだ後で自身も楽しむべきだ」ということです。

～「先憂後楽」ということ～

多くの市民が「コナ禍で苦しんでいるのに、東村山市長も、議員も、市民税を原資とする自分たちの報酬を引き下げようとしません。他市では、市長や議員自身が報酬カットをしているところもありますし、国会議員も報酬を2割カットしています。

市民の現状を無視し、報酬カットどころか自分たちの報酬や政務活動費を引き上げることになり、死に至るようになっては話になりません。

私たち市民は、口先だけで美味しいことを言っている議員の本質を、しっかりと見極めなければなりません。

発行人編集長 矢野ほづみ